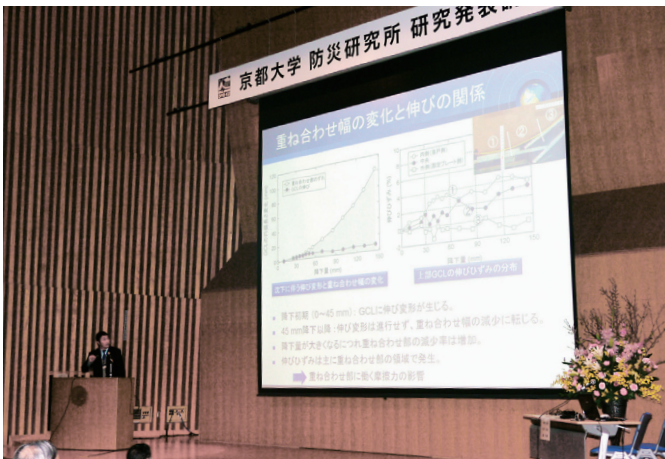


DPRI Newsletter

Disaster Prevention Research Institute
Kyoto University

No.68 2013年5月

京都大学防災研究所



研究発表講演会 (P4)



研究発表講演会ポスターセッション (P4)



国際フォーラム集合写真 (P6)



宮崎観測所全景 (P9)

CONTENTS

ご挨拶	2
所長就任にあたって	大志万 直人
イベント	4
平成 24 年度防災研究所研究発表講演会報告	平石 哲也
同 奨励賞	
ハイライト	6
DPRI International Forum (防災研究所国際フォーラム) 報告	寶 馨、多々納 裕一、岩田 知孝
研究集会	7
流域災害研究センターシンポジウム 2012	米山 望

シリーズ 若手研究者の声	8
迷いの中でも持っていたい、Noblesse Oblige	
一人の若手研究者が抱えるモヤモヤ	小槻 峻司
シリーズ 研究の最前線	9
宮崎観測所	山崎 健一
掲示板	10
平成 25 年度 共同研究・共同研究集会	
平成 24 年度 学会賞等の受賞一覧	
新スタッフ紹介	
人事異動	
頭脳循環ニュースレター No.2 のご案内	

ご挨拶



防災研究所所長 大志万 直人

所長就任にあたって

4月1日から2年間、防災研究所所長を務めることになりました。皆さまのご協力とご理解をよろしくお願い致します。

一昨年(2011年)の3月11日に、東日本を襲った東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)以降、その余震活動もいまだ続いている中、その周辺地域はもちろん関西より西の地域でも地震活動が活発化しているようにも思えます。また、世界でも大きな地震の発生が続いている状況があります。さらに、地震災害以外の自然災害でも、大規模な台風や、いわゆる爆弾低気圧による竜巻を含む様々な気象災害、水災害、地盤災害など国内で大きな自然災害が頻発しています。このような状況で、地震、火山、地すべり、洪水、高潮、暴風雨など、わが国のほとんどの自然災害の研究を行っている防災研究所の役割はますます重要になってきています。

—防災研究所の目指すもの—

防災研究所は、自然災害の実態を解明するための基礎研究、実態を踏まえたうえで災害低減を図る応用研究、そして理工学系のみならず社会科学も取り入れた災害と防災を横断的に探る総合研究を軸にこれまで活動してきました。大学にある研究所の責務として

求められることは、第1義的には、高い質の学術的成果です。したがって、防災研究所も質の高い学術的なアウトカムを出してゆくことが重要であることに關しては議論の余地はありません。

しかしながら、一方で、防災研究所に課せられたもう一つの重要な使命は、学術的な高みだけではなく、社会・国民(ひいては人類の)の安心と安全に具体的に寄与することであろうと思います。つまり、高い学術的成果の段階にとどまらず、減災社会実現化の方法の探求する実践科学の推進であり、研究成果を社会、国民にとって身近なところに、具体的に実装してゆくことであろうと思います。

それから、大学の研究所として重要なもう一つの役割は、やはり教育です。防災研究所は、3つの研究科の協力講座として大学院生の教育に当たっていますし、学部生に対する一般教養科目等の提供を通して、京都大学における教育にも関わってきています。また、共同利用・共同研究拠点としての各種共同研究や研究集会に他大学の多くの大学院生が参加することや、防災研究所内の各種ポスドク研究員と共に研究を推進することで、次世代の研究者養成にも深く貢献してきたと自負しています。しかし、現在、教養教育を含めた学

部教育の更なる充実、また、学位プログラムのもとでの教育などが広く議論されており、今後、研究科・学部とは異なった大学内における研究所の教育に対する役割に関して、さらに考えてゆかなければいけないと思っています。

—拠点機能の強化—

防災研究所は1951年に「災害の学理とその応用の研究」を行う目的で発足しました。一昨年には創立60周年を迎えたわけですが、その間、平成8年からは全国共同利用施設として、また、平成22年度より「自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究拠点」としての認定を受け、大型の研究設備や大量の資料・データ等を基にした共同利用・共同研究を推進してきました。このように長い歴史を持つ研究所であるがゆえに、隔地施設の老朽化に対する対応や大型設備の更新の必要性が喫緊の課題としてあります。このような諸問題を解決すると共に、上に述べた減災社会実現化の方法の探求する実践科学の推進を行うために、「共同利用・共同研究拠点」としての機能強化も取り組んでゆかなければならない重要なテーマです。このような考えのもとに、より地域社会に近い形で実践科学の共同利用・共同研究を推進するための新しいスキームを検討しています。このような拠点機能の強化により、これまで以上に具体的に社会・国民（ひいては人類の）の安心と安全に寄与できるような共同研究推進のための仕組みを作ってゆきたいと思っています。

—国際的な共同利用・共同研究拠点—

現在、防災研究所では外国の44研究機関と国際学術交流協定(MOU)を結び、国際共同研究の実施、大学院生等の短期交流を含む人的交流を活発に行っています。さらには、こういった協定は結ばないもとでの外国人研究者との共同研究の例もあり、防災研究所全体では非常に数多くの研究機関との国際共同研究を推進しています。また、人的交流は、外国人客員教員等の枠組みや、研究所からも各種の研究者の派遣プログラム等を活用しても行われています。このような活動に加えて、防災研究所が拠点申請をした際にも、国内の共同利用・共同研究拠点としてだけでなく、国際的な共同利用・共同研究拠点としての機能も果たそうと言うことで、国外からの共同利用の応募等が可能なように様々な工夫をしました。現在、少しずつその成果が現れてきています。

このような国際的な学術交流のもとに、国内からの共同利用・共同研究への参加の際にも、様々な国から共同利用・共同研究に参加している研究者との交流や協働ができるような共同利用・共同研究拠点機能をさ

らに発展させてゆきたいと思っています。

—研究・教育に対するエフォート率の最大化—

昨年、防災研究所内で教員の活動状況を分析したところ、大型外部資金の獲得が必ずしも研究成果、すなわち学術論文という出力に必ずしも直接的につながっていない側面があるという結果がでました。

研究には、その研究を推進している局面と、その成果がどんどん出てくるという局面が必ずしも一致するわけではないということがありますので、分析対象にした期間の長さ等に問題があるということもあろうのですが、大型外部資金の獲得のための努力と、プロジェクト期間中の運営部分に、かなりの時間をとられることも事実です。とはいえ、研究活動には一定の資金が必要なことも確かで、いわゆる外部資金の獲得は、研究所の広範な研究活動を維持するためには欠かすことができません。

現在、研究所を取り巻く、と言うよりは、大学を取り巻く状況には、非常に厳しいものがあります。国立大学法人化以降、通常の運営費交付金は効率化係数という一定の割合での削減が続き、必要な研究費は外部資金を独自の努力でという大きな流れがあるからです。また、法人化後、各種の大学に関わる評価が多重に実施されており、そのための資料作成にも時間を割かざるを得ない状況があります。

このように、国立大学の法人化以降の現状は、一人ひとりの教員の研究・教育に費やす時間の良と質を下げたままの状況ばかりです。また、実は、上に述べた防災研究所が取り組むべき今後の課題を実現してゆく際には、一人ひとりの教員の研究・教育へのエフォート率を下げかねない面もあるという、ある意味で逆説的な側面もあります。

しかしながら、大学の主要な活動、つまり、研究・教育は、完全に時間集約型の活動であるといえます。つまり、一人ひとりの教員が研究・教育にかけられる時間の量と質をどのように確保するかということが、組織にとって最も重要です。これを実現するための特効薬があるわけではないのですが、防災研究所全体としての取組を考えながら、一人ひとりの教員が研究・教育にかけられる時間の量と質を確保するための方策を探ってゆきたいと思っています。

京都大学の特色である「自由な学風」に根ざした柔軟な発想を個々の研究所構成員が持った上で、前所長の提唱された“「研究所の団結」とそれに立脚した研究”を継続し、防災研究所の目指すところの成果の大輪が花開くように、2年間、全力を尽くしたいと考えていますので、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

イベント

平成 24 年度防災研究所研究発表講演会報告

平成 24 年度防災研究所研究発表講演会は、平成 25 年 2 月 19 日（火）と 2 月 20 日（水）の 2 日間にわたり、きはだホールを中心に開催しました。両日も、桂キャンパスでの他の用務と重なり、関係する先生方は分刻みの移動で大変ご面倒をおかけしました。それにも関わらず、講演のキャンセルや大きな時間変更も無く、無事開催できたのは、参加者全員の熱意と尽力の賜物です。平成 24 年度は、退職教授の特別講演はなく、中島正愛所長の挨拶に引き続き、ゲスト講演として京都大学名誉教授梅田康弘先生に「南海地震の予知に向けて」というチャレンジ的な講演をしていただきました。続いてハイライト講演として川瀬博教授から「地震防災の中期的課題と戦略—都市空間安全制御の観点から—」の講演があり、両者とも、地震防災の緊急性と都市の脆弱性を判り易くお話いただいたもので、大変有意義な講演内容でした。

24 年度の災害調査報告は、以下の 3 件でした；

竹林洋史准教授「2011 年タイ中部洪水災害調査報告」、山敷庸亮准教授「陸域から海域への放射性セシウムの移行調査と予測」、丸山敬教授「2012 年 5 月に北関東で発生した竜巻被害」。この他にも、24 年度は北部九州での豪雨災害（7 月）、京都市北部での集中豪雨災害（7 月）、宇治市での洪水（8 月）など、身近

な場所でも大きな災害が頻発し、地球温暖化による気候変動の影響が全国的に広がっているのではないかと危惧しています。

一般講演は、5 会場に分かれて開催され、発表件数 157 件でした。ポスターセッションは 2 日目にコアタイムを設けて多くの方が議論に参加できる形式としました。総数は 44 編でした。今回は、会場をきはだホールの周辺に集めたために、狭い会場ができ、総合防災のセッションでは入室できない方もおられ、会場確保が今後の運営課題と思われま

す。なお、今年度も若手研究者を対象に奨励賞を設けました。審査は各セッションの司会者の評価、ポスターセッションでは教職員の投票をもとに実行委員会で決定いたしました。受賞者は次頁の通りです。

2 日目の全発表の終了後、懇親会を宇治生協会館で行い、川崎一朗本学名誉教授による乾杯挨拶の後、フロアでは研究に関する議論や最近の研究状況について活発な意見交換がありました。また、奨励賞受賞者は中島所長から直接賞状と花束の授与が行われました。

今後も、会場確保などの教訓も踏まえ、より活発な防災研究所研究発表講演会を開催していきたいと思

います。
(行事推進専門委員会 平石 哲也)



講演および研究発表の様子

平成 24 年度防災研究所研究発表講演会の奨励賞

平成 22 年度より、若手研究者の積極的な参加と発表を促し、研究者の研究を奨励し、かつ、研究発表講演会のいっそうの活性化を図ることを目的として「防災研究所研究発表講演会奨励賞」（以下、「奨励賞」）を設けています。

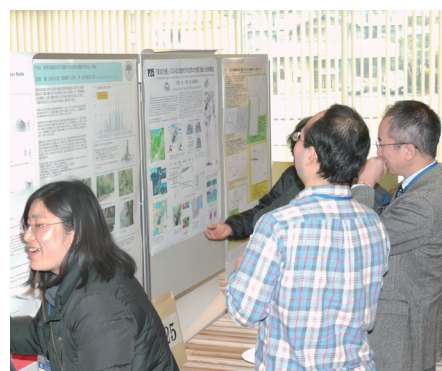
平成 24 年度の奨励賞は、以下の 8 名の方が受賞されました。



左から孫英英さん、内出崇彦さん、澤村康生さん、遠藤寛也さん、中島正愛所長、直田梓さん、Weili DUAN さん、中野真帆さん、李フシンさん

平成 24 年度研究発表講演会奨励賞受賞者（順不同）

発表セッション	部門・センター	分野・領域	MC/DC	氏名	発表題目
総合防災	巨大災害研究センター	巨大災害過程研究領域	DC2	孫 英英	動画 カルテの開発・作成を中心とした防災活動に対する考察
地震・火山	地震防災研究部門	地震発生機構研究分野	学振特別研究員	内出 崇彦	2011 年東北地方太平洋沖地震の初期における動的破壊過程
地盤	工学研究科 社会基盤工学専攻	社会基盤創造工学分野	DC2	澤村 康生	アーチカルバート盛土におけるカルバート縦断方向の地震時挙動に関する遠心模型実験
大気・水	気象・水象災害研究部門	暴風雨・気象環境研究分野	MC2	遠藤 寛也	静止気象衛星を用いた雲粒有効半径の観測
大気・水	流域災害研究センター	都市耐水研究領域	MC1	直田 梓	橋桁に作用する津波波力の数値計算
GCOE	社会防災研究部門	防災技術政策研究分野	DC1	Weili DUAN	Anomalous Atmospheric Events Leading to Kyushu's Flash Floods, 2012
ポスター	地盤災害研究部門	山地災害環境研究分野	MC1	中野 真帆	2009 年パダン地震が誘発した降下軽石堆積物の崩壊メカニズム
ポスター	巨大災害研究センター	巨大災害過程研究領域	DC1	李 フシン	復興過程における被災住民とマスメディアの関係性～「明星災区」概念の茨城県大洗町への適用～



発表・受賞の様子

ハイライト

DPRI International Forum (防災研究所国際フォーラム) 報告

2013年3月11日～13日に宇治キャンパスにおいて International Forum on Research Institutes for Disaster Risk Reduction (略称 DPRI International Forum) を開催しました。世界16カ国から110名あまりの参加により盛大に開催することができました。

本国際フォーラムは平成23年11月に行われた世界防災研究所サミット(ニュースレターNo.63号)において議論された、自然災害研究に係る研究機関の国際連合(International alliance of research institutes for disaster risk reduction)を推進するために企画しました。周知期間が短かったために世界防災研究所サミットの第2回という形にはなりませんでしたが、防災研究所で現在取り組んでいる先端的な国際共同研究、各研究機関での教育・社会貢献活動に関する基調講演、パネルディスカッションを通して国際連携をすすめるための情報共有の場を作ることができました。

1日目は、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「複雑化する巨大災害に対する総合防災学確立に向けた最先端国際共同研究」を進めている若手研究者の海外派遣をもとに、渡航先機関等の研究者を招へいし、現在取り組んでいる巨大地震・地震災害・極端気象に関する最先端研究発表を行い、議論しました。詳しくは別添ニュースレターNO.2を参照ください。

2、3日目には、極端気象と適応社会の生存科学に関する研究発表の他、4件の基調講演、3つのパネルディスカッションが行われました。Salvano Briceno 先生(IRDR 副会長)、Jakob Rhyner 教授(国連大学)、Andrew Collins 教授(Northumbria 大学)、Jean-Francois Rocchi 先生(フランス地質調査所長)による4件の基調講演は、拡大する様々な自然災害に立ち向かう研究、

機関、組織のあり方についての話題提供が行われました。また、パネルディスカッションでは、研究ネットワーク、社会貢献、教育をテーマとし、各機関や各研究分野に関する話題提供が行われました。フロアからの活発な質問や議論もあり、予定した時間をオーバーすることもしばしばありました。

日程の最後に全体討論時間を設け、多々納教授の司会のもと、総合的災害リスク軽減研究のための国際研究所連合の活動内容や今後のミーティングの進め方などに関して議論を行いました。2015年に予定されている国連防災会議に向けて、何らかの貢献を果たしていこうということになり、大変活発な議論を行いました。2013年9月4～6日に英国ニューキャッスル市 Northumbria 大学で行われる「総合防災に関する国際会議」において、次回の企画委員会を開催することとしました。

本国際フォーラムは、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「複雑化する巨大災害に対する総合防災学確立に向けた最先端国際共同研究」、グローバルCOEプログラム「極端気象と適応社会の生存科学」、博士課程教育リーディングプログラム「グローバル生存学大学院連携プログラム」、及び防災研究所特定研究集会「国際防災研究フォーラム設立準備会合並びに第2回世界防災研究所サミット」の協働によって開催しました。記して感謝いたします。本国際フォーラムの内容については、以下のホームページをご参照ください。

(<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/dpri-i-forum/default.html>)

(社会防災研究部門・寶 馨、多々納 裕一、地震災害研究部門・岩田 知孝)



写真1 研究発表の様子



写真2 パネルディスカッション



写真3 実験施設の見学



写真4 実験施設の見学

研究集会

流域災害研究センターシンポジウム 2012

流域災害研究センターシンポジウム 2012 を 3 月 21 日に防災研究所連携研究棟で開催しました。このシンポジウムでは、流域災害調査の報告会を通して、防災・減災に関する情報交換を行うとともに、同センターの教育プログラムの一つとして、留学生、日本人学生による英語での研究発表会を行いました。当日は、藤田正治センター長の挨拶後、以下のプログラムでシンポジウムが進められました。(敬称略)

プログラム

10:00 ~ 12:00 司会：William J. Pringle (M1 学生)

【英語による学生研究発表会】

1. Experimental study on the combined effect of seepage and river flows on the erosion characteristics of non-cohesive riverbanks (Aly El-Dien Ahmed)
2. Application of a combined model of sediment production due to freeze-thaw phenomena and sediment runoff (山野井一輝)
3. Study of wave-induced scour depth around various arrangements of pile groups (Gazanfari Hasemi Samaneh)
4. An experimental study on effective control structure for mitigation of debris flow disasters (KIM Yeonjoong)
5. Experimental Study on Manhole Head Losses Coefficients with Different Shapes and Pipe Configurations (LEE Seungsoo)
6. Experimental Study of Bed Variation due to the Installation of Different Shapes of Groynes (MANSOORI Amir Reza)

7. Three-dimensional Numerical Analysis to the Estimation of the Tsunami Force Acting on a Bridge (直田 梓)
8. Development of a Combined 2D-3D Numerical Tsunami Propagation-Inundation Flow Model and its Application to the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake Tsunami in Kamaishi Bay (William J. Pringle)

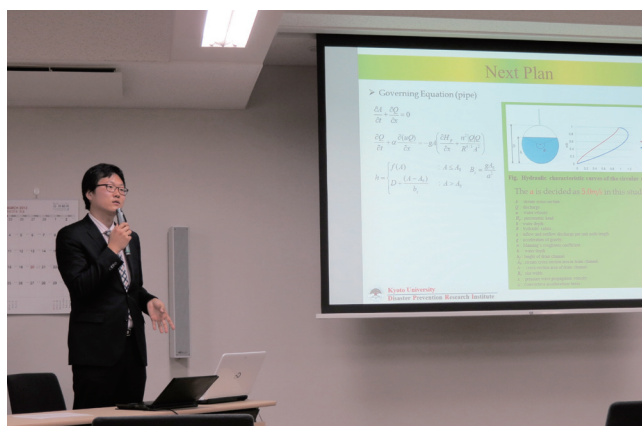
13:30 ~ 17:15 司会：米山 望

【流域災害調査報告会】

1. 最近の気象災害について (林 泰一)
2. 九州北部土砂災害調査報告 (藤田正治)
3. 2012 年災害調査—和歌山・和田川、那智川— (馬場康之)
4. 平成 24 年 7 月 21 日北京豪雨災害について (張浩)
5. Recovery Situation in South-West Myanmar from 2008 Cyclone hazard (平石哲也)
6. インド・ヒマラヤ西部、ラダーク地方における水害と水害対策の現状 (池田菜穂)
7. 2012 年宇治水害調査報告 (竹林洋史)

参加者は 33 名。英語による学生研究発表会では、日本人 2 件を含む 8 件の発表があり、各研究室の最新の研究が紹介されました。また、流域災害調査報告会では、センター教員が 24 年度に実施した調査および関連する研究成果を紹介した後、熱心な討論が行われ、災害調査の重要性は勿論、災害調査結果を共有して議論することの有用性が再確認されました。

(流域災害研究センター 米山 望)



英語による学生研究発表会の様子



流域災害調査報告会の様子

シリーズ 若手研究者の声

迷いの中でも持っていたい、Noblesse Oblige - 一人の若手研究者が抱えるモヤモヤ -

We have developed speed but we have shut ourselves in. Machinery that gives abundance has left us in want. Our knowledge has made us cynical, our cleverness hard and unkind. We think too much and feel too little. More than machinery, we need humanity. More than cleverness, we need kindness and gentleness.

- チャールズ・チャップリン “独裁者” より

冒頭、長々と引用から入ったのは、この演説が今の私が抱える“モヤモヤ”を端的に表していると思うからです。1940年に世に出たこの映画は、全体主義に向かう当時のドイツに向けた強い風刺を含んでいます。70年を経た今、チャップリンが指摘した問題に対して、今の社会は回答を得たでしょうか？

研究活動には、論理的思考が要求されます。近年の世相からは、西洋的な合理的思考への傾倒も感じます。人間は論理的思考に依って、時間・空間・関係のスケールを広げ、世界を考えることができます。しかし抽象化は、常に個々の振る舞いを無視する危険性をも孕む事をチャップリンは指摘しています。

研究が社会に還元される社会デザイン段階で、論理と感情のどちらに立つべきか。同世代の友人とは、“純粋科学と社会貢献”、“長期政策と短期政策”、“全体主義と個人主義”といった議論をよくしますが、それらは根本的に同じ問題に起因している気がします。論理・理性か、感情・愛か？ 須らく全ての主義・主張・思想が善悪を含んでいる以上、これらの問題は0と1の二分法で考える問題ではなく、バランスの問題です。個人のバランスであり、社会のバランスでもあります。私の抱えるモヤモヤは、自分の中のバランスに確信できていないことに起因しています。私は研究者として純粋科学の発展に寄与したいと願っていますが、一人の人間として、こういう childish な問題を、もう少し考えて行きたいと思っています。

—研究を通して果たしたいこと—

私の研究では、人間活動を考慮した全球水資源モデルの開発を行っています。近年の急激な経済発展・人口増加に伴い、貯水池や灌漑に代表される人間活動が水循環に与える影響も大きくなっており、そういった人間活動の影響を考慮した、水循環の実態把握が重要です。また、将来の気候データを用いて、気候変動が水循環や食糧生産に与える影響を評価しています。最

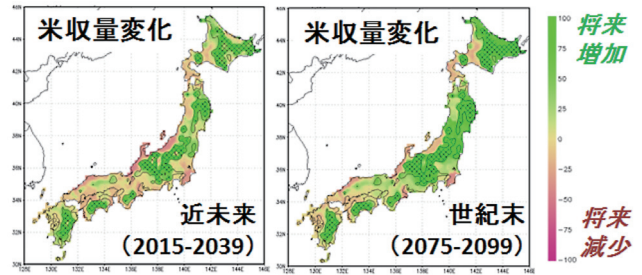


図 予測される将来の日本の米生産量変化

終的な目標は、自らの研究によって世界の食糧の安定生産・増産に貢献することです。

—Now let us fight to fulfill the promise!—

防災には、自然科学の追求に限らず、社会背景の理解も必要です。私自身は、アジアやアフリカの大陸河川に赴いて、河川管理や住民生活を見てきました。自らの視野を広げるべく、現地の若い研究者と歴史・宗教・政治の議論も積極的に行っています。宗教に敬虔な方々には、本当に心を打たれます。

素直に、この年齢で多くの異国に行く機会を頂いていることを、大学や国に感謝しています。社会や国が自分に向けた投資を、何らかの形で返したいとの責任も感じます。先に挙げた全体主義と個人主義、論理と感情。どういったバランスに確信できるか、今の私は未だ回答を得ていません。しかし、迷いの中でも“Noblesse Oblige”（位高ければ、徳高きを要す→環境に恵まれた者は、その力を社会の為に用いるべきである）の精神は忘れずに持ちたいと思います。何年後かに自分でこの記事を振り返った時に、何らかの答えを見つけている事を自らに期待しつつ、今後も研究に励みたいと思います。

(水資源環境研究センター 博士3年 小槻 峻司)



写真 2011年タイ洪水のインタビュー (Tak 県寺院にて)

シリーズ 研究の最前線

宮崎観測所

宮崎観測所（写真）は附属地震予知研究センターの隔地施設のひとつです。現在、常勤・非常勤あわせて4名の教職員が勤務しています。



写真：宮崎観測所。左の建物は観測坑道入口

宮崎観測所の主要な役割は、横穴を利用した地殻変動の精密連続観測です。観測所には総延長約300mの観測坑道（トンネル）が敷設されており、そこに設置した伸縮計と傾斜計を利用して、地殻のひずみの変動を 10^{-9} 程度の精度で計測しています。この値は長さ100kmの棒が0.1mm（髪の毛の太さ程度）縮んだ場合のひずみに相当します。九州・四国の複数点で同様の観測が実施されており、宮崎観測所で保守・データ処理を行っています。

横穴を利用した地殻変動連続観測は、宮崎観測所では約40年前に始まりました。1990年代以降、地殻変動研究についてのほとんどの成果はGPSなどの衛星測地技術によりもたらされるようになりましたが、数時間以下の時定数をもつ地殻変動の分解能では今でも横穴式観測が勝ります。例えば鹿児島県の伊佐観測点（火山活動研究センター吉松観測室に併設）では、2011年の新燃岳噴火時に噴火活動に対応するひずみの変化が捉えられていますが、その中には他の計測手法では明確には見ることのできない噴火数時間前の地下の膨張を示唆する変動も含まれていました。この発見は噴火プロセスを解明する上での重要な手掛かりになるはずですが。

本観測所のもうひとつの重要な役割は、南九州における高密度地震観測です。現在日本では、防災科学技術研究所等による地震計ネットワークが展開されてい

ますが、それを部分的にさらに高密度化しています。宇治地区・桜島・阿蘇（理学研究科附属地球熱学研究施設）の教職員らと協力して、南九州を東西あるいは南北に貫く複数の測線上に約5km間隔で地震計を設置し、九州周辺で発生した地震だけでなく、遠方で発生した地震による地震波も記録しています。

南九州で高密度地震観測を実施する目的のひとつは南九州の地下の流体（水）の分布の推定です。南九州の地下にはフィリピン海プレートが沈み込んでおり、地上には桜島や霧島といった火山があります。火山のマグマの生成には海洋プレートから抜け出した水の挙動が深く関わることが知られています。地下の水の分布を知ることは、火山噴火の根本的な原因を調べることにつながるのです。そして、水の分布を推定する手掛かりが地震波形解析で得られます。いくつかの断面について、結果が出つつあります。

さて、本観測所は残念ながら学内でもあまり知られていません。本稿の読者の中にも本稿で初めてその名を目にした方がおられることでしょうか。現在は地震予知研究センター周辺の一部の研究者のみが観測方針を決めて、そのデータを利用しています。限られた人だけで観測を進めていると次第に視野が狭まり、現状維持で満足してしまいがちです。しかし、研究において現状維持は退化と呼ぶべき状態です。観測所外の方々との議論の機会を増やすことが、遠隔施設において観測研究（観測に基づく研究）を進める上では必須であると筆者は考えています。

宮崎観測所は隔地施設としては珍しく、比較的アクセスの良い場所にあります。宮崎空港からは車で15分程度ですし、列車も1時間に1本弱の頻度で通っており、最寄り駅からは徒歩で来所可能です。また近辺には観光地も多く、「鬼の洗濯板」と呼ばれる波状岩で有名な青島も徒歩圏です。宮崎観測所に興味をもたれた方は他の用務や観光のついででもよいのでぜひ一度お立ち寄りになり、観測施設、特に観測坑道をご覧ください。地震の発生に関心を持つ筆者の目には地殻変動を測る道具として映る観測坑道は、異なった研究に携わる皆様の目には他の“何か”を測る道具として映るかもしれません。そこから新しい研究の芽が生まれるならば嬉しいことです。

（地震予知研究センター 山崎 健一）

掲示板

平成 25 年度共同研究・研究集会

一般共同研究

研究課題	(研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
東日本大震災における支援物資と燃料輸送の実態解明	(24・25)	奥村 誠 (東北大学東北アジア研究センター)	多々納 裕一 (社会防災研究部門)
東北地方太平洋沖地震津波から学ぶ南海・東南海地震津波対策に関する共同研究	(24・25)	重松 孝昌 (大阪市立大学大学院工学研究科)	間瀬 肇 (気象・水象災害研究部門)
長周期地震動を受ける高層建築物における杭基礎の液状化地盤上の終局メカニズムの解明	(24・25)	木村 祥裕 (東北大学未来科学技術共同研究センター)	田村 修次 (地震災害研究部門)
アンサンブルシミュレーションによる台風の可能最大豪雨の推定：2011年台風12号による紀伊半島豪雨を対象とした事例研究	(24・25)	宮本 佳明 (独立行政法人理化学研究所)	竹見 哲也 (気象・水象災害研究部門)
高潮・波浪災害リスク軽減に向けた大気-海洋-地盤系における界面力学過程に関する現地調査	(24・25)	内山 雄介 (神戸大学大学院工学研究科)	森 信人 (気象・水象災害研究部門)
国内最大規模の人工水路を用いた土砂ダム（天然ダム）の決壊メカニズム	(24・25)	岡田 康彦 (独立行政法人森林総合研究所)	福岡 浩 (斜面災害研究センター)
拡張現実を用いた津波ハザードマップ技術の開発	(24・25)	高橋 智幸 (関西大学社会安全学部)	森 信人 (気象・水象災害研究部門)
東日本大震災における造成地地すべりデータベースの作成と総合的な街区耐震化モデルの提案	(24・25)	井口 隆 (独立行政法人防災科学技術研究所)	釜井 俊孝 (斜面災害研究センター)
始良カルデラからのマグマ移動量の能動的検出のための基礎研究	(24・25)	筒井 智樹 (秋田大学大学院工学資源学研究所)	井口 正人 (火山活動研究センター)
不同沈下する粘性土地盤上の埋地地盤の液状化ポテンシャル評価	(24・25)	一井 康二 (広島大学大学院工学研究院)	井合 進 (地盤災害研究部門)
京都大学に所蔵されている自然災害史料の解読と画像化	(25・26)	中西 一郎 (京都大学大学院理学研究科)	加納 靖之 (地震予知研究センター)
多周波音波探査による沿岸表層堆積物中に記録された津波、洪水イベントの可視化	(25・26)	原口 強 (大阪市立大学大学院理学研究科)	平石 哲也 (流域災害研究センター)
詳細湖底地形調査に基づく琵琶湖湖底断層位置の特定および湖内急斜斜面の地震時安定性評価	(25・26)	竹村 恵二 (京都大学理学研究科附属地球熟学研究施設)	釜井 俊孝 (斜面災害研究センター)
福島原発事故に伴う放射性物質の初期拡散沈着過程把握のためのデータベース構築	(25・26)	谷田貝 亜紀代 (京大大学生存圏研究所)	寶 馨 (社会防災研究部門)
原子力災害時の緊急対応のためのマルチスケール大気拡散予測モデリングに関する研究	(25・26)	中山 浩成 (日本原子力研究開発機構)	竹見 哲也 (気象・水象災害研究部門)
General Collaborative Research on Assessment of Collapse Safety Margin in High-rise Steel Framed Structures under Extreme Earthquake Loading Beyond Current Code Specifications	(25・26)	Gilberto Mosqueda (カリフォルニア大学サンディエゴ校)	中島 正愛 (地震防災研究部門)
新しい津波避難支援ツールの開発と実装－全国最悪の想定に挑む－	(25・26)	城下 英行 (関西大学社会安全学部)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
建物等構造要素毎の被害評価による竜巻等の突風風速推定指標の策定（日本版Enhanced Fujita Scaleの策定に向けて）	(25・26)	前田 潤滋 (九州大学大学院人間環境学研究院)	丸山 敬 (気象・水象災害研究部門)
薄膜型ナノ工学センサを使用した鋼構造建物の被災後即時健全性モニタリング	(25・26)	Jerome P. Lynch (ミシガン大学)	倉田 真宏 (地震防災研究部門)
高潮予測に対する高波浪、強風下のエアレーションへの混相流体力学的寄与	(25・26)	渡部 靖憲 (北海道大学大学院工学研究院)	森 信人 (気象・水象災害研究部門)
気象レーダによる噴煙の実態解明と火山防災	(25・26)	真木 雅之 (鹿児島大学地域防災教育研究センター)	井口 正人 (火山活動研究センター)

萌芽的共同研究

研究課題 (研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
南海トラフの巨大地震・津波を想定した地域住民の防災意識の向上に関するアクションリサーチ —個別訓練を中心とする動画カルテの開発と活用— (25)	孫 英英 (京都大学大学院情報学研究所)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
復興過程における被災住民とマスメディアの関係性～「明星灾区」概念の茨城県大洗町への適用～ (25)	李 勇昕 (京都大学大学院情報学研究所)	矢守 克也 (巨大災害研究センター)
擬似雑音多重弾性波を用いた火山マグマのリアルタイム観測の研究 (25)	棚田 嘉博 (第一工業大学工学部)	井口 正人 (火山活動研究センター)
広帯域地震動生成の観点に基づいた2011年東北地方太平洋沖地震の震源モデルの構築 (25)	久保 久彦 (京都大学大学院理学研究科)	岩田 知孝 (地震災害研究部門)

一般研究集会

研究集会名 開催予定日：下段	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
『公助・共助・自助』を踏まえた工学・法学協働の基での新たな洪水リスクマネジメント制度 平成25年8月～10月	佐伯 彰洋 (同志社大学大学院法学研究科)	堀 智晴 (水資源環境研究センター)
防災知識の普及に向けた地学教育の現状とその改革 平成25年8月8日～9日	中村 尚 (東京大学先端科学技術研究センター)	向川 均 (気象・水象災害研究部門)
火山灰の影響に関する国際ワークショップ 平成25年7月19日	石峯 康浩 (国立保健医療科学院)	味喜 大介 (火山活動研究センター)
減災社会の構築を目指す防災ネットワーク形成のための研究集会（防災計画研究発表会2013） 平成25年9月27日～28日・平成26年3月17日	高木 朗義 (岐阜大学工学部)	多々納 裕一 (社会防災研究部門)
災害リスク統合研究ワークショップ 平成25年8月23日	塚原 健一 (九州大学大学院工学研究院)	寶 馨 (社会防災研究部門)
内陸地震の発生予測に関する現状と展望—東北地方太平洋沖地震の発生を受けて— 平成25年7月30日～31日	岩崎 貴哉 (東京大学地震研究所)	飯尾 能久 (地震予知研究センター)
気候変動および地殻変動活動の影響下での土砂災害に関する第3回国際研究集会 平成25年9月26日	山田 孝 (三重大学大学院生物資源学研究所)	藤田 正治 (流域災害研究センター)
台風災害の発生メカニズム解明と減災に関する研究集会—気象学・風工学・土木工学・情報学を交えて— 平成25年9月13日～14日	筆保 弘徳 (横浜国立大学教育学部)	林 泰一 竹見 哲也 (流域災害研究センター)
第9回南アジアにおける自然環境と人間活動に関する研究集会—インド亜大陸東部・インドシナの自然災害と人間活動 平成25年12月26日～27日	福島 あずさ (神戸学院大学人文学部)	林 泰一 (流域災害研究センター)
山地流域における革新的な土砂観測・計測技術とその活用 平成25年10月17日～19日	伊藤 隆郭 (日本工営中央研究所総合技術開発部)	堤 大三 (流域災害研究センター)

短期滞在型共同研究

研究課題	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
Shelter Design and Adaptation Strategy to Reduce Disaster Vulnerability	ムハンマド カムルジャマン (ラジシャヒ工科大学)	松島 信一 (社会防災研究部門)
1999年イズミット地震断層に沿った比抵抗構造における不均質性の研究—比抵抗構造によるアスペリティ構造評価の試み—	エリフ チフトチ (ボアジチ大学カンディリ観測所・地震研究所)	大志万 直人 (地震防災研究部門)

長期滞在型共同研究

研究課題	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
Flume tests for improved forecasting of post-wildfire debris flows	Sérgio D.N. Lurenço (カーディフ大学)	釜井 俊孝 (斜面災害研究センター)
火山性の低周波音に関する洞察	Elizabeth Swanson (ブリストル大学)	井口 正人 (火山活動研究センター)
山岳地域を対象とした洪水地すべり早期警戒システムへの衛星リモセンデータや観測データの同化に関する研究	Yang Hong (オクラホマ大学)	石川 裕彦 (気象・水象災害研究部門)

重点推進型共同研究

研究課題 (研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
自然災害科学に関わる研究者・ステークホルダーとの協働による総合防災学の活用に関する研究 (24・25)	寶 馨 (社会防災研究部門)	平石 哲也 (流域災害研究センター) 横松 宗太 (巨大災害研究センター)
突発災害時における初動調査体制の拡充および継続的調査研究の支援 (24・25)	寶 馨 (社会防災研究部門)	平石 哲也 (流域災害研究センター) 横松 宗太 (巨大災害研究センター)

拠点研究 (一般推進)

研究課題 (研究年度)	研究代表者
ブータンヒマラヤのサイスマテクトニクスの研究 (25)	大見 士朗 (地震防災研究部門)
リアルタイム深層崩壊検知システムの構築 (25)	山田 真澄 (地震防災研究部門)
極端気象現象による積雪地帯の土砂災害発生機構の解明に関する拠点研究 (25)	松浦 純生 (地盤災害研究部門)
岩石のせん断破砕に伴う高周波数振動の計測が開く岩石破壊力学の新展開 (25)	王 功輝 (斜面災害研究センター)

拠点研究 (特別推進)

研究課題 (研究年度)	研究代表者
総合的地震災害リスク管理に関する国際共同研究拠点の構築に向けた研究 (25)	川瀬 博 (社会防災研究部門)
津波予測モデルの精密化とその成果を用いた住民への津波防災・減災知識の普及活動の拠点形成 (25)	間瀬 肇 (気象・水象災害研究部門)

特定研究集会

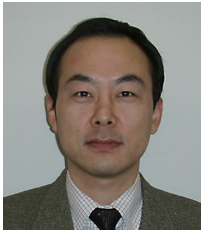
研究課題	(開催予定日)	研究代表者
「日本列島変動マッピング計画」へ向けて	(平成25年8月29日、30日)	福島 洋 (地震予知研究センター)
国際シンポジウム「地球科学の挑戦」(第3回京都大学-オクラホマ大学サミット) (平成25年9月18日～平成25年9月20日)		中北 英一 (気象・水象災害研究部門)
より良い地震ハザード評価の出し方・使われ方	(平成25年7月19日)	橋本 学 (地震予知研究センター)
流域圏環境合モデリングと防災減災への活用手法の検討	(平成25年10月4日)	角 哲也 (水資源環境研究センター)
災害リスクと向き合うための教育教材	(平成25年11月30日)	後藤 浩之 (地震災害研究部門)

平成24年度学会賞等の受賞一覧(受賞日順)

受賞者(教職員)	受賞内容	受賞日
間瀬 肇/森 信人/安田 誠宏	文部科学大臣表彰 科学技術賞 (科学技術振興部門)	平成24年 4月 9日
山田 真澄	朝日21関西スクエア賞	平成24年 4月19日
赤倉 康寛	日本沿岸域学会論文賞及び日本海洋工学会JAMSTEC・中西賞	平成24年 7月13日
中北 英一	水文・水資源学会 学術賞	平成24年 9月27日
倉田 真宏	日米先端工学シンポジウム Best Speakers Award	平成24年10月31日
間瀬 肇/森 信人/ 安田 誠宏/志村 智也 (DC1)	土木学会 海岸工学論文賞	平成24年11月16日
日比野 研志(D3)/石川 裕彦/ 石岡 圭一 (理学研究科)	日本気象学会気象集誌論文賞	平成25年 1月 8日
中島 正愛	米国土木学会 Ernest E. Howard Award	平成25年 1月15日
中尾 節郎	東京大学地震研究所 地震火山災害予防賞	平成25年 1月15日
平石 哲也/馬場 康之/久保 輝広	土木学会 水工学論文賞	平成25年 3月 6日

受賞者(学生/受賞当時)	受賞内容	受賞日
後藤 源太 (MC1)	土木学会関西支部年次学術講演会優秀発表賞	平成24年 6月 9日
佐々木 義志 (MC1)	土木学会関西支部年次学術講演会優秀発表賞	平成24年 6月 9日
佐藤 佳世子 (MC1)	日本地球惑星科学連合固体地球科学セクション学生優秀発表賞	平成24年 6月15日
Xinyu JIANG(DC 2)	Silver Prize Paper Award in Young Scientist Session, IDRiM	平成24年 9月 8日
前田 純伶 (MC1)	日本地震学会学生優秀発表賞	平成24年12月19日
遠藤 寛也 (MC2)	米国気象学会 Student Poster Competition: Second Place	平成25年 1月10日
松下 紘資 (社会人DC2)	国際航路協会 De Paepe-Willems Award	平成25年 1月31日
岡崎 純也 (MC2)	日本風工学会優秀修士論文賞	平成25年 3月11日

■ 新スタッフ紹介



気象・水象災害研究部門水文気象災害研究分野 特定准教授 ^{キム スンミン} Kim, Sunmin

平成 25 年 2 月 1 日、気象・水象災害研究部門水文気象災害研究分野の特定准教授として、着任しました。文部科学省外国人特別奨学生として平成 15 年 10 月韓国から来日して、防災研究所で寶馨教授・立川康人准教授の指導で平成 18 年 9 月「Stochastic Real-time Flood Forecasting with Weather Radar and a Distributed Hydrologic Model」の学位論文で博士（工学）学位を取得しました。その後、本研究所特定研究員および特任助教として平成 21 年 12 月まで従事、「韓国台風災害の学術調査と日韓における水災害発生機構の比較調査研究」（代表 防災研究所 立川康人准教授）、そして文部科学省 21 世紀気候変動予測革新プログラムの課題「流域圏を総合した災害環境変動評価」（代表 防災研究所 中北英一教授）において水災害軽減のための研究を行いました。

平成 22 年 1 月から平成 25 年 1 月までは、京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻の講師として従事、工学部・工学研究科での専攻科目に対して日本語および英語で講義を行い、また、本学大学院工学研究科附属「グローバルリーダーシップ大学院工学教育推進センター」の留学生専門教員を兼任し、国際化対応科目の担当・留学生指導および奨学金審査などを担当しつつ、本学の国際化に関する教育活動を行いました。

現在は、平成 25 年 2 月から防災研究所に戻りまして、文部科学省気候変動リスク情報創生プログラム「課題対応型の精密な影響評価」（代表 防災研究所 中北英一教授）の中で気候変動に伴う水災害の変化予測と不確実性評価、水災害に関する社会・経済的影響評価に関する研究を行っています。これから益々頑張りたいと思いますので、皆様からのご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。



社会防災研究部門防災公共政策（国土技術研究センター）研究分野 特定教授 ^{よしたに じゅんいち} 吉谷 純一

平成 25 年 4 月 1 日付けで、社会防災研究部門防災公共政策（国土技術研究センター）研究分野の特定教授に着任しました。昭和 58 年に当時の建設省に採用され、土木研究所に配属となって以来、国土交通省の研究所にて、河川計画、洪水予測、水文観測、地球温暖化影響予測、水資源マネジメント、水循環健全化などの水文・水資源分野における研究やユネスコ後援の水災害・リスクマネジメント国際センター（ICHARM）の設立準備を行ってきました。国が行う研究は、学術研究とは異なり、本省や現場の問題解決や政策立案支援に直結する研究がほとんどでした。そのため、まずは具体的問題を分析し、その解決に向けた目標と手法や成果の反映を事前に計画することが求められます。自ら持つ技術は限られるため、学界や民間で開発された技術を加工し組合せることが多々あり、防災研究所を始めとする国内外の多くの先生方の協力を得た研究を行ってきました。中北英一先生が代表を務める創成プログラム、その前身の革新プログラムの一員としていただいたことにより、気候変化に適應する治水計画の道のりが見えてきたと思っています。また、研究開始当初は予想しない好結果を後に生んだ例も多々ありました。岡田憲夫先生、多々納裕一先生に誘われて、国際応用システム分析研究所（IIASA）と一緒に訪問したことがきっかけで、IIASA からは ICHARM 設立にあたって様々な協力をいただくことができました。寶馨先生代表の CREST プロジェクトに参画させていただきタイ国チャオプラヤ河の水資源モデリングの共同研究をタイ王立灌漑局と実施した実績があったため、2011 年タイ洪水の政府対応も迅速に行うことができました。防災公共政策研究分野は、国や地方政府の役に立つ研究をすることが使命ではありますが、このような経験を踏まえ、短期的な成果ばかりを追い求めることはせず、大学ならではの立場を利用した幅広い活動をしたいと考えています。皆様のご指導ご鞭撻よろしく申し上げます。



地震予知研究センター海溝型地震研究領域 准教授 ^{にしむら たくや} 西村 卓也

平成 25 年 4 月 1 日付けで地震予知研究センター海溝型地震研究領域の准教授として着任いたしました。私は、東北大学大学院理学研究科博士課程前期（修士）終了後、平成 9 年建設省（現・国土交通省）国土地理院に入省し、この 3 月まで地震や火山噴火等に伴う地殻変動及びテクトニクスの研究を行ってきました。この間、平成 13 年 11 月からの 1 年間は、米国地質調査所（USGS）の W. Thatcher 博士のもとで大地震後の粘弾性緩和による地殻変動の研究を行いました。東日本大震災から 2 年が経過しましたが、私の博士論文の研究テーマは、GPS データを用いて東北地方太平洋沖の沈み込み帯におけるプレート間の固着に関するものでした。その結果は東北地方では最近 100 年間の地震活動では解消されない程、2000 年当時の歪み蓄積速度が大きいことを示していたにもかかわらず、マグニチュード 9 という超巨大地震（東北地方太平洋沖地震）がその後発生することを想定することが出来ませんでした。東北地方で超巨大地震は発生しないという従来の考え方にとらわれすぎていたために、解析結果に対して偏った解釈をしてしまうことになり、研究を進める上で大きな教訓となりました。西日本では初めての生活となりますが、近い将来間違いなく発生する南海トラフの巨大地震に向けて、基礎研究から防災・減災に貢献する応用研究まで、鋭意努力していきたいと思っています。今後ともよろしく申し上げます。



火山活動研究センター 准教授 ^{なかにち} 中道 ^{はるひさ} 治久

平成 25 年 4 月 1 日付で、名古屋大学大学院環境学研究科から火山活動研究センターの准教授として着任いたしました。学部・大学院は東北大学（地球物理学）にて岩手火山の地震学的研究をしました。その後、東京大学地震研究所の時に防災科学技術研究所にポスドクとして在籍して富士山の研究に従事し、その間に米国地質調査所に長期滞在しました。帰国後、名古屋大学の地震火山・防災研究センター（現地震火山研究センター）の助手（2007 年に助教）になり、学部・大学院教育と地震観測網の維持、火山観測研究に従事してきました。その間に、御嶽山 2007 年微噴火に先行する超長周期地震の震源過程の解明をし、2011 年新燃岳噴火開始直後から地震計アレイ観測を実施しました。今後は共同利用・共同研究拠点であることを活用して、桜島をはじめとする火山をフィールドとして世界最先端の観測研究を進めると同時に次世代を担う人材の育成と日常の地域貢献をしていきたいと思ひます。ドイツの火山学者 Schminke の著書にある「火山研究者にとって、火山噴火の予測手段を向上させること、あるいは火山性加害因子の性質を明らかにすること、そして減災に務めることは責務である」をモットーとしていきたいと思ひます。火山観測所は大学の施設ですので研究と教育が任務ですが、加えて観測データの収集の任務があります。人間の寿命よりも圧倒的に長い火山の営みを記録して後世の研究者にも役立つように残す必要があります。また、最新の解析手法と知見を用いてデータから火山活動を解明していくことも任務だと思ひます。普段は鹿児島におりますので、皆さんにお会いする機会は少ないかもしれませんが、どうぞよろしくお願ひいたします。



技術室（観測技術グループ）^{せき} 関 ^{けんじろう} 健次郎

平成 25 年 4 月 1 日付で技術室に配属になりました。4 月中は宇治で研修を受け、5 月から桜島の火山活動研究センターに勤務しています。

3 月までは、京都大学で文化人類学を専攻してきました。総合人間学部人間・環境学研究科修士課程を経て、農学研究科博士後期課程中途退学での就職になります。学部での卒論は、京都の消防団の活動をテーマに取り組みました。大学院ではアフリカの南東沖にあるマダガスカルで、都市近郊の農民の商業活動と特産品の成立について研究していました。当面は目の前の職務をこなすことで精一杯

かもしれませんが、少しずつ着実に力をつけ、将来的には人文社会科学分野への技術支援もできるようになりたいと思ひております。

出身は、川崎市ですが鹿児島の高校に三年間通っていた経歴があり、およそ 10 年ぶりに鹿児島で暮らしております。高校時代は山岳部に所属して、霧島や屋久島に登っておりました。桜島はその頃からすでに一般人の入山が禁止されており、今回業務に携わることで初めて間近に接することになります。

火山学や観測業務は、今は素人ですが、先輩職員の指導のもと、一日も早く職責を全うできるよう精進して参りますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



技術室（実験技術グループ）^{なかがわ} 中川 ^{じゅん} 潤

平成 25 年 4 月 1 日付で技術室に配属になりました。当面は、先輩職員のもとで主に振動台を担当させていただきます。昨年度に修了した兵庫県立大学大学院では生態学を専攻し、京都大学宇治キャンパスのすぐ西側に位置する巨椋池干拓地で生物群集を調査していました。農道を歩きながら、水田に生息する鳥類を観察し、人間活動が鳥類に与える影響を調べていました。歩き慣れた調査地の近くに勤務するようになったことに、少なからず運命を感じております。今まで学んできた分野とは異なっているため、分からないことばかりで迷惑をおかけすることもあるかと思ひますが、先輩方を見習い、

少しでも早く技術を習得していきたいと存じます。防災の分野は、近年さらに注目が高まっているため、社会に対する責任も大きくなっていると感じます。その防災分野に携われることに、大きな期待感を抱いております。

最後になりましたが、今後少しでもお役に立てるよう精いっぱい頑張っていきたいと考えておりますので、ご指導のほどよろしくお願ひいたします。

■ 人事異動

《転入等》

〈平成 25 年 4 月 1 日付〉

[採用]

吉谷 純一 特定教授 社会防災研究部門
 (←国土交通省国土技術政策総合研究所河川研究部流域管理研究官)

西村 卓也 准教授 地震予知研究センター
 (←国土交通省国土地理院地理地殻活動研究センター主任研究官)

中道 治久 准教授 火山活動研究センター
 (←名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山研究センター助教)

関 健次郎 技術室 (観測技術グループ)

中川 潤 技術室 (実験技術グループ)

[昇任]

山崎 友也 技術室情報技術グループ副グループ長
 (←技術室実験技術グループ主任)

〈平成 25 年 5 月 1 日付〉

[採用]

清水 美香 特定助教 社会防災研究部門
 (←公益財団法人地球環境戦略研究機関特任研究員)

《転出等》

〈平成 25 年 3 月 23 日付〉

[辞職]

坂 靖範 技術室機器開発技術グループ副グループ長

〈平成 25 年 3 月 31 日付〉

[定年退職]

松波 孝治 准教授 地震災害研究部門

[任期満了]

安田 成夫 特定教授 社会防災研究部門
 (→(独)土木研究所水災害リスクマネジメント国際センター特別研究監)

梶谷 義雄 特定准教授 社会防災研究部門
 (→一般財団法人電力中央研究所地球工学研究所地震工学領域主任研究員)

〈平成 25 年 4 月 1 日付〉

[配置換]

山敷 庸亮 准教授 社会防災研究部門
 (→本学大学院総合生存学館准教授)

〈平成 25 年 4 月 30 日付〉

[辞職]

多田 光宏 技術室実験技術グループ

「複雑化する巨大災害に対する総合防災学確立に向けた最先端国際共同研究」ニュースレター No.2 のご案内

平成 23 年度から開始した日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」の採択課題「複雑化する巨大災害に対する総合防災学確立に向けた最先端国際共同研究」の活動に関して、ニュースレター No.2 を作成しましたので、ご覧ください。内容は平成 24 年度派遣された若手研究者からの滞在先での活動状況報告や、今後派遣予定の若手研究者の研究計画などです。また、平成 25 年 3 月に行われた本プログラムの国際シンポジウムについての報告も掲載しております。
 (若手育成ワーキンググループ 岩田 知孝)

編 集 後 記



撮影：HM

新緑のまぶしい季節となりました。防災研究所では、平成 25 年 4 月より大志万 直人所長を筆頭とした新しい体制での活動を開始しています。

今号では、所内でのそうした新しい動きをお知らせする

とともに、2月に開催した平成 24 年度研究発表講演会について取り上げました。

また、3月に本研究所で開催した自然災害研究に係る世界各国の研究機関の連携推進のための防災研究所国際フォーラムや、流域災害研究センターシンポジウムなど、所内で開催された研究集会などを中心に最近の動向をお伝えしています。

編集：広報出版企画室 広報・出版専門委員会
 発行：京都大学防災研究所
 連絡先：〒611-0011 宇治市五ヶ庄
 TEL：0774-38-4640 FAX：0774-38-4254
 URL：http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/
 ご意見・ご要望は下記Eメールまでお寄せください。
 e-mail: dpri-ksk@dpri.kyoto-u.ac.jp